まえがき

本書は、十七世紀ロシアの傑出した聖職者であり政治家でもあった総主教ニーコンの生涯とその時代を綴った評伝です。本書の記述の主な対象はニーコンですが、十七世紀ロシアを語る上では、ニーコンと同じく逸することのできない二人の人物、長司祭アヴァクームと、皇帝アレクセイ一世の人生についても同時に記し、時代と人間の関係を浮き彫りにするように努力しました。

付録として挙げたニーコンの伝記は、イワン・シュシェリンというニーコンの弟子によって書かれたもので、その内容や構成等については、この後に簡単に記してあります。評伝、伝記、どちらから読んでいただいてもかまわないのですが、両者を比較していただきたいと考えています。

本書を執筆するにあたっては、『ジョゼフ・フーシェ――ある政治的人間の肖像』をはじめとしたシュテファン・ツヴァイクの作品を参考にしました。フーシェとロベスピエール、ルターとエラスムスなど、相対する個性の対立や確執、あるいはその激突の中に歴史のドラマを見ようとするツヴァイクの方法を取り入れています。

シュシェリン『総主教ニーコンの伝記』について

巻末に訳出したのは、同時代人によって書かれた総主教ニーコンの唯一の伝記です。作者であるイワン・シュシェリン（コルニリエフという別名も持つ）は、その生涯の多くをニーコンとともにすごした忠実な弟子の一人だったと思われる人物ですが、詳細は知られていません。

一六〇五年生まれのニーコンは、一六四九年にノヴゴロドの府主教になりますが、シュシェリンはこのときノヴゴロドの住民の一人として伝記の中に顔を出します。その時はまだ年少であった、と書かれていますので、一六三〇年代の生まれかと思われます。

ニーコンはノヴゴロドの府主教をへて、一六五二年にモスクワ総主教となります。一六五八年に自らクレムリンを去ってモスクワの西部にある新エルサレムに籠るまでが、ニーコンの絶頂期ですが、伝記の中には、この間のことがわずかしか記されていません。新エルサレムでの生活の後、教会会議によって総主教位を剥奪され、フェラポントフ修道院に幽閉され死に至る期間の記録がきわめて細かく、全体の半分以上を占めています。記述は後半になるほど冗長になり、前半と後半で書き手が違うのかと疑われるほど、構成の緊密さに差があります。

シュシェリン自身の人生についてわかっていることはほとんどありませんが、ノヴゴロドをめぐる記述中に突然現れたシュシェリンは、ニーコンが総主教位を剥奪される一六六六年の教会会議の場面になって、再び「私」として伝記の中に登場します。ニーコンに先立ってクレムリンに到着したシュシェリンは、兵士に拘束され、皇帝アレクセイのもとに引き出された後、投獄され、さらにノヴゴロドに監禁されました。

シュシェリンはその後、一六七九年に皇帝アレクセイの妹タチアナ后妃によってノヴゴロドから解放され、一六九三年に亡くなったと言われています。

一六六六年に総主教位から追われて北方の修道院に幽閉されたニーコンは、一六八一年にモスクワへ戻る途中に亡くなります。おそらくシュシェリンは、ノヴゴロドから解放された直後にフェラポントフ修道院に幽閉された師匠の

もとを再び訪ね、その地で伝記を書き始めたものと思われます。もしこの推測が正しいとすれば、シュシェリンによるニーコン伝の執筆とアヴァクームによる自伝の執筆は、ほぼ同時期だった、ということになります。

シュシェリンのニーコン伝は、教会分裂や古儀式派にまつわる資料の中では重要なものと思われますが、その価値が十分に認識されているとはいえません。アヴァクームの自伝をはじめとした古儀式派による書き物は、各種の古典文学のアンソロジーの中に必ず収録されていますが、シュシェリンのニーコン伝はほとんどの場合無視されています。「ニーコン＝悪役」という固定観念がなお強いのですが、十七世紀ロシア最大の事件といってもいい教会分裂の実態は、一方の当事者であるニーコンの側からも研究されねばならないものと思われます。

シュシェリンのニーコン伝には四つの写本があると言われています。活字化されたのは二度で、一七八四年にオシプ・コソダヴレフ（コソダヴレフについては、最近、金沢友緒氏による詳細な研究が公にされました。『ロシア啓蒙主義の迷景（ミラージュ）――エカチェリーナ二世時代の官僚作家が目指した「近代」』群像社、二〇二四）によって刊行されたものと、一九〇九年にピョートル・バルチェネフによって『ルースキー・アルヒフ』に載せられたものがあります。

この二つの資料は、内容的にもかなり異なっています。大筋は同じですが、細部にはかなり違いがあります。それぞれが別の写本を利用した、ということならわかりやすいのですが、両テキストとも、複数の写本を混ぜ合わせて作られているので、話はやっかいです。それぞれの編者がどのような根拠でどのような取捨選択をしたのか、そこにどんな恣意が働いているのか、あるいは働いていないのかは、よくわからないのです。刊行された形と四つの写本の関係を精査した研究も出ていません（写本のひとつはネット上に公開されています）。

一般には、一九〇九年に公にされたバルチェネフ版がオリジナルの形に近いと考えられており（一七八四年版は、原本にはなかったと考えられる小見出しが細かくついています）、各種の本の中でもこちらが底本として利用されていますので、本書でもこれを底本とし、必要に応じて一七八四年版を参照する形にしました。

訳文はできるだけわかりやすいものにするようこころがけました。この時代の文献の常で、皇帝や総主教には（ときに三行、四行にわたるような）過剰な形容詞が付されることもありますし、クレムリンのウスペンスキー聖堂などは、さまざまな名前で呼ばれています。不要な形容詞は省略し、固有名詞の呼び名はできるだけ統一するようにしま

した。

翻訳は番号をふって細かい部分に分け、各部分の冒頭に梗概を示しましたが、これは本編である評伝との関連を知っていただくための処置です。

1　世に出るまで

後のモスクワ総主教ニーコンは、一六〇五年、モスクワの東約四百キロの位置にあるニジェゴロド地方、現在のニジヌィ・ノヴゴロド市（**地図1**）近くのヴェルデマノヴォという小さな村（**地図2**）で生まれました。シュシェリンの伝記によると、その誕生は五月二十四日とされています（**図1**は、ニーコンの生誕地に置かれた小さな石碑です）。

一六〇五年は、ロシアの首都モスクワで皇帝の地位にあったボリス・ゴドノフが病死した年で、ここからロシアの動乱時代がはじまるのですが、ニーコン自身の幼少年時代は、この国家未曽有の危機とは無関係に流れていったようです。ニーコンが歴史の表舞台に現れるのは四十歳をこえたころで、ロシアと周辺諸国を揺るがした動乱も終わり、ロマノフ王朝の時代が始まっていました。壮年期を迎えた時期に突如歴史の表舞台に姿を現して、歴史そのものを変えるような役割をになった人物は、ロシア史上にもきわめて珍しいのですが、ニーコンは、年を重ねるにしたがって徐々に野心を強め、複雑な個性をあらわにしはじめた、というタイプの人間です。

ニーコンが歴史上に姿を現すきっかけになったのは、時の皇帝アレクセイ一世とのモスクワでの出会いですが、ここに至るまでのニーコンの人生については、明確なことがわかっていません。付録にあげた『総主教ニーコンの伝記』が、ニーコンの幼少年時代から青年時代を経て壮年期にいたる歩みを知る唯一の典拠といってもよいのです。作